



ミハイル・カリキス《Children of Unquiet》2014年. 映像(シングルチャンネル、カラー、ステレオ)、15'30" © Mikhail Karikis.



厚木たか《わたし達はこんなに働いてゐる》(監督 水木荘谷)1945年.
映像(白黒、モノラル)、18'18" © Taka Atsugi.

ヘクトール・サモサ《Inconstância Material》(英題 Material Inconstancy) 2012-13年.
映像(カラー、ステレオ)、5'15" © Héctor Zamora.
協力: イスタンブール・ビエンナーレ

『第三の歯車』

2015年10月11日(日)～11月1日(日)

厚木たか、ミハイル・カリキス、ヘクトール・サモサ

キュレーション：アサクサ、倉敷科学芸術大学 川上研究室

アサクサは、厚木たか、ミハイル・カリキス、ヘクトール・サモサによるグループ展「1: 第三の歯車」を開催いたします。ドキュメンテーションやフィールドリサーチの出力方法として映像メディアを取り上げ、移りかわる世代・政治・ジェンダーの通史的な視座を通して、コミュニティのあり方を考察します。近代をつうじて集団形成の核をなしてきた労働活動は、マテリアルな生産から、サービスや情報を中心とする非物質的な創出へと移りかわってきました。こうした状況を背後に、アートにおける社会的関与の方法も、構築した状況を通じて未来をリハーサルする思考実験の場へと変容しています。本展では、特定の地理や歴史的地点を参照する3つの映像作品をとりあげ、これからのコミュニティ創出の鍵となる意識-コラボレーション、ボランティア、権力の分散、公的資産と第三セクター、知識・エネルギー資源の共有-を作品のうちに投影し、変化すべき現状を問い直します。

生涯を通じて反戦運動に参加した**厚木たか**は、一貫してジェンダーの視点をドキュメンタリー映像に投じてきました。短篇ドキュメンタリーの脚本家として、写真化学研究所(PLC、東宝映画の前進)に勤めた厚木は、終戦の緊張が高まる1945年、藤沢市にある縫製工場にて女性工員を記録した《わたし達はこんなに働いている》(監督:水木荘也、1945年)を制作します。「わたし達はこんなに働いているのに、なぜサイパン島では日本軍が玉砕してしまったのだろう。」肩を寄せあう女工たちの新聞報道から着想した本作は、個が全体性に回収される心理構造の危険と、過度の感情移入が引き起こす心理劇の極点を描いています。情報局の一方的な編集のため、厚木のイメージは本来の意図からはかけ離れ、押し付けられた虚構の物語との二重拘束のうちに、捉えがたくさまよいます。中心に対して周囲を従属させる管理モデルを過去のものとするに、現代の出発点があったとすれば、ジェンダーの差異をも統制したこの歴史的地点に、現在に続くあらゆる問題の萌芽を見いださるのではないのでしょうか。

メキシコ出身のインスタレーション作家 **ヘクトール・サモサ**による《Inconstância Material》(“Material Inconstancy” 2012-13年)は、第13回イスタンブール・ビエンナーレ(2013年)で行われたパフォーマンスの記録映像。36人のレンガ工が大学施設を占拠し、轟然とした掛け声のなかで一人からまた次の職工へとレンガを投げ交す運動のループが続きます。工事現場の一日を教育の現場に移した行為の再現は、建築素材として安価でありふれた土レンガと職工の身体性を介し、商品が終わりなく自転し続ける状況を生み出します。経済活動に再考をうながし観客を参入させるきっかけを与える本作は、商品の流通と過剰な顧客サービス、そして私的所有のために引き起こるさまざまな掛け引きに疑問を付します。そこにはアート業界への内省的な記述を含んでいるといえるでしょう。とめどない流通の過程で、私たちはいったい何を失い、また何を獲得しているのでしょうか。作業の工程に引き起こる人的エラーや、欠損を受け入れる眼差しがなければ、労働を達成する喜びさえ生み出すことができないのかもしれない。

ロンドン在住のアーティスト・パフォーマー **ミハイル・カリキス**は、参加者の声を媒介として人間の記憶や想像力の可能性を探索します。イタリア・トスカーナ州にある世界初の地熱発電所-かつては5千人の労働者を抱えた村落も、近年のオートメーション化によって廃墟となりました。《Children of Unquiet》(2014年)は、こうして村から離れた子どもたちを再び集結し、発電所を占拠する映像作品です。子どもたちは過去の記憶を辿り、この土地で耳にした毎日の音-一間欠泉から噴き出すしびき音、発電所のパイプ管から絶え間なくなり響く低音-を発声します。そして、生態にもとづいた経済モデルと愛の生産力に触れたネグリ&ハート著《コモンウェルス》(2011年)の一節を朗読しています。人工によるエネルギー産業と自然による大地の音響を結びながら、日々の風景をコーラスする参加者は、生まれ育った共同体とグリーンエナジーの始点に立ち返っていきます。

産業の衰退やエネルギー問題が問いただされながらも、集団の声掻き消されてしまう昨今において、本展は次のような疑問を導きます。情報化した現代にあっても、私たちが歴史的、地理的集団性のうちに閉じ込めてしまうとすれば、その要因は何なのでしょう。物理的なコミュニティという結束を失った現代において、最大公約数の社会問題にどのように取り組むことができるのでしょうか。

「第三の歯車」は、アサクサと倉敷芸術大学川上研究室との共同キュレーションによって企画されています。

アーティスト:

厚木たか(1907年、群馬県伊勢崎生まれ - 1998年没)は、ドキュメンタリー映画作家、社会活動家、婦人運動、反戦運動家。日本プロレタリア映画同盟(プロキノ、1930-34年)解体後、英国の記録映画作家ポール・ローサの《ドキュメンタリーフィルム》(1935年)を翻訳、戦前の映画製作現場に影響を与えた。PCL文芸課芸術映画社勤務するかたわら記録映画のシナリオを執筆。《或る保姆の記録》(監督:水木荘也監督、1942年)の構成を担当、国民映画賞受賞。《転換工場》(監督:森永健次、1944年)脚本担当。《われわれは監視する—核基地横須賀—》(監督:荒井英郎、横須賀を映画で記録する会、1975年)がモスクワ映画祭平和委員会賞、ライブツィヒ国際記録・短編映画祭金鳩賞をそれぞれ受賞。生涯にわたって、左翼運動、婦人運動に関わりジェンダー、紛争問題、社会的不正をテーマとした映画制作に取り組んだ。日本女子大学文学部英文学科卒。

ミハエル・カリキス(Mikhail Karikis 1974年、ギリシャ・テッサロニキ生まれ)は、さまざまな音の発声によって、集団的な記憶と想像力とを引き出すアーティスト、パフォーマー。参加者の発声による協働的行動を通して、社会的、地政学的なコンテキストを引き出し、声を「彫刻素材」として生活の諸相や職業アイデンティティをかたどる。2014年には、『Listening』(ヘイワード・ギャラリー、ロンドン)、『Mediacity Seoul』(ソウル美術館、ソウル)、第19回シドニー・ビエンナーレ(シドニー)、『Assembly』(テート・ブリテン、ロンドン)、『Inside』(パレ・ド・トーキョー、パリ)に参加。国際展では、あいちトリエンナーレ(2013年)、マニフェスタ9(ゲンク、2013年)、第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ、デンマーク館(2011年)ほか。2015年には大和日英基金アートプライズにノミネート、また本年の『The British Art Show』に選出される。カリキスはロンドン大学パートレット校で建築を学んだ後、同大学スレード芸術大学院にてMAとPhDを取得。ロンドン在住。

ヘクトール・サモラ(Héctor Zamora 1974年、メキシコ・メキシコシティ生まれ)は、公共空間に遊戯的に介入し、レディーメイドの拡張によって観客を取り込むインスタレーション作家。公園をはじめとする都市環境の物理的特性を活かし、観客の想像力をかき立てる状況を生み出して地域社会への直接的な関係性を構築する。主な展覧会に、2012年に『Resisting the Present: Mexico 2000/2012』(パリ市立近代美術館、パリ)、および『Art Unlimited』(メッセ・バーゼル、バーゼル)、2011年『32° Panorama da arte Brasileria』(サンパウロ)、2010年にはリバプール・ビエンナーレ、あいちトリエンナーレ、2009年第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2006年

第27回サンパウロ・ビエンナーレ、ハバナ・ビエンナーレ、2005年に釜山ビエンナーレ、『Eco: Arte Mexicano Contemporáneo』(ソフィア王妃芸術センター、マドリード)。Universidad Autónoma Metropolitana-Xochimilco大学にてグラフィック・デザインBFA取得。ブラジル、サンパウロ在住。

キュレーター:

倉敷科学芸術大学 川上研究室では、アート教育プロジェクト"Education, Education and Education" (EEE)を企画し、制作活動が展覧会を通じてどのように発展し、批評的なディスコースを生み出していくのかを学習する。過去にはジョン・バルデッサリ、ライアン・ガンダー、ヨシュア・オコンらの展覧会を実施。厚木たか、ミハエル・カリキス、ヘクトール・サモラとの『第三の歯車』は、本プロジェクト5回目の展覧会。

アサクサは、ギャラリーキュレーターが運営する、40平方メートルの一般住宅を改築したプロジェクト・スペース。キュレーター間のコラボレーションを推進する。厚木たか、ミハエル・カリキス、ヘクトール・サモラとの『第三の歯車』が初の展覧会となる。次回展は11/7~12/6にかけて、英国人アーティスト オリバー・ピアによる個展『Oliver Beer: Deconstructing Sound』。共同キュレーター Matthieu Lelièvre (タダエス・ロバック・ギャラリー、パリ)。大和日英基金(ロンドン)の協力により青山|目黒(東京)で開催される本作家個展との同時開催となる。

展覧会情報

会場: アサクサ

住所: 東京都台東区西浅草1-6-16

営業時間: 土曜日 ~ 月曜日(12:00 - 19:00)

その他の曜日は予約制

プレス連絡先: 大坂紘一郎

osaka@asakusa-o.com

090-8346-3232